
マコと一葉の剣 グラス・オニオン

小倉 慎平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マコと一葉の剣 グラス・オニオン

【NNコード】

N7922Z

【作者名】

小倉 慎平

【あらすじ】

十一才の少年マコルディス・クイーデル王子（通称マコ）はクーデーターと共に国を追放された。サンガルド王国で王の側近だったアルミゲウ・ギース（アル）それに新たに加わった旅の仲間であるリーアムース・ベルドラド（リア）とクローネンバーグ・ユイソナー（クロネ）と共にシエラの街に行き着いた。

その街で人々は古の魔女の脅威に怯え、どこからともなく現れたヴァイオレーターと呼ばれる怪物の来襲に怯えていた。それに加え、

ヴァイオレーター退治と称して街で好き放題する魔導士軍団に街は不安と不満を抱えている。

マコたちは街を支配するこれらの脅威から解放しようと立ち上がるが、やがて影が恐ろしい陰謀を繋いでいた……

旅の仲間と一葉の剣

巨漢の男が狭く薄暗い路地を駆け抜けて行く。

男は建物の裏手に積み上げられた木箱や樽を、その巨大な体とは裏腹に、巧みに避けて走った。途中でいくつかをなぎ倒したが、それは追手を妨害するためだった。

一方、男を追う警官隊は額に汗の玉を浮き立たせながら、進行方向にある障害物をたどたどしく乗り越えた。

男は黒いボロきれのようなローブのフードを頭からすっぽり被り、全力で走っているにも関わらず、汗一つかいていない。それどころかフードの下からは唇がにっと吊り上がり、男がニヤついている事がわかる。

余裕すら見せている。

男は四件の殺人を犯していた。一件目は三人、二件目はふたり、そして三件目と四件目はそれぞれひとりずつ。生意気な態度を取つたヤツらに思い知らせてやつたのだ。彼を相手に自分たちがどれだけ無力かという事を。そして無能な警察から逃げ切る事は、男にとっては簡単な事だった。

「逃げても無駄だ！ 追いつめられるだけだぞ」

うしろからひとりが叫んだが、男の口もとを余計に吊り上がらせただけだった。

狭い路地をしばらく走ると、光とともにざわめきと熱気が漏れ出す通りにさしかかった。路地を抜け出し出店の建ち並ぶ大きな通りに出る。

にぎわう客たちでつくられた群れの間を、男は無理やり搔き分けながら進んだ。客たちはうしろからいきなり押されたり、体をねじこまれたりして、驚きの声をあげた。また、罵声も聞こえた。

絶対に捕まるものか。大衆を搔き分けながら男はニタニタ笑つて

思つた。能のない警官屋どもに、この大魔術師であるジジリウさまが捕まるわけはないのだ。

決して。

十二才の少年マコルディス・クイーテル ふだんはマコと呼ばれていた は人ごみでにぎわう市場を歩いていた。きらきらと輝く目が市場中のあちらこちらへ行ったり来たりを繰りかえしている。ずっと旅をしてきた彼にとってこんなに大きな街は久しぶりの事であつたし、にぎわう人々の群れもまた懐かしみのあるものだった。

「しかし、まあ、これだけ大きな街だと、こうもにぎわうもんなんだな」

アルミゲウ・ギースは幼いマコにくらべるとやたらと背が高かつた。一九才という年齢を考えると、成長期を過ぎた体はもう大人としてできあがつており、ふたりの身長差はあって然るべきだつたが、それをふまえたとしても、アルの身長は高かつた。

アルは金色の長髪の持ち主だった。よく天使の毛のようだと言いい表されてきたし、女の子たきが思わず振り返つてしまつほど整った綺麗な顔立ちをしていた。瞳の色はハシバミ。腰にはベニヤの板を何重にもしてかたどつたような短剣を差している。短剣とはいえ木製であるため、刃もなく、切ることはできない代物だつた。

対するマコは赤みがかつた茶色の髪にグリーンの瞳。背中には自分の背丈と同じ大きさの大剣を背負つていた。

「うん、そうだね。でも、ずっと旅して来て初めてわかつたけど、ぼくらの街つてほんとうに大きなところだつたんだね」どこか寂しげで悲しみに満ちたマコの声。旅立つた故郷の事を思つている。

「そうだな。いまはもう戻れないが、いや、いつか必ず戻つてみせるぞ」

アルはマコの頭をぽんと叩いてやつた。これはアルがマコを元気づける時にやるしぐれで、これをやられると彼はいつも勇気を奮い起しられるのだった。

そういうた信頼関係がふたりの間には築かれているし、アルは必要ならば身をていしてでもマコを守る心づもりでいる。マコはそれを知っているし、だからこそアルを完全に信頼してその身を預けている。

「なんなのよ、ふたりしてしんみりしちやつて」一緒にいたリアが不満そうな声を漏らした。「せっかくの市場なんだから、もっと明るくいこうよね。ホラ、ああおいしそうな匂いもする!」「

リアの本名はリーアムース・ベルドラードといった。ふたりが彼女と出会ったのはついこの間の出来事で、この家出少女はふたりが断つたにも関わらず勝手に着いて来てしまった。出会いは決して深い意味のあるものではなかつたが、こうして彼女はマコたちの仲間としていまでは深い関係にある。

そしてもうひとり、旅の仲間がいた。マコよりもふたつ年上の姉さんで、クローネンバーグ・ユイソナー。仲間からはクロネと呼ばれていた。髪の色は黒く艶やかで、前髪は眉の上までまっすぐに切りそろえられており、うしろ髪は膝裏の間接部分にまで届いていた。目は少し赤みがかつた濃い紫色をしており、その瞳の中心部から外に放射線状の模様があつた。彼女の瞳はすべてを飲み込もうとしているように、引きつけるような力があつた。

マコ、アル、リア、クロネの四人は北に向かつて旅を続けており、街を通り抜けるついでに市場の観光をしていた。

たのしい見学になるはずだつたのだが、いつもトラブルを呼ぶ四人のことだ、そのトラブルがまっすぐ彼らの前方からこちらに向かつて来ていた。まるで磁力に引き寄せられるかのように。

その気配をいち早く察知したのがクロネだつた。細い人差し指をまっすぐ前に向け、首だけをマコに向けて言つた。「なにかしら。あちらから騒がしいのが来るけど」

マコはクロネに合わせて立ち止り、彼女が指差す方向を凝視した。

「ホントだ。なんだろ?」

マコは首を傾げて考えた。遠くで群衆がざわついている。そのざ

わつきがだんだんとこちらに近づいているのがわかつた。

「お祭り騒ぎってわけでもなさそうだな。ん？ なんだかうしろも騒がしいぞ」

アルの言つた通り、うしろからもなにかの騒ぎが聞こえる。「していください」などと叫び声が聞こえた。

前方からもやはり声が聞こえた。なにかを追つているのだろうか。「待て」「やら」「逃げられんぞ」などの叫んでいふよつだ。どれも怒まじりの声だった。

始めのうちはなにが起つてているのかマコにもわからなかつたが、だんだんとその正体がつかめてきた。

前方からみすぼらしい格好をした男が人ごみをかきわけて出てきたのだ。そのうしろからはその男を追つ警官たち。どうやら、人ごみの中で捕り物劇が行われているらしい。

ぼろぼろのローブを全身に被つた男は、進行方向からも追つ手が来ているとわかると、立ち止まってどちらに進もうか迷いだした。だが決して男は焦つてなどいなかつた。それどころか楽しんできているようにマコには見えた。

それがあまり良い兆候だとは思えない。

そのうちに追つ手が前後から近づいてきた。

警官の必至の形相から、この男が殺人を犯したのではないかとマコは懸念した。実際、男の目からは人を平氣殺せる人間特有の氷のような冷たさを放つていた。

「さあ、もう観念するんだ」警官隊はジゴラをとり囲むと、拳銃を向けた。

そう言われても諦める男ではない。彼はすぐ近くにいたマコに田をとめると、マコの腕をぐいっと引っ張つて、一瞬のちに捕らえてしまつた。男の左腕がマコをがつちりとつかまえ、右手はマコの頭に向けられている。密着した男の体から汗と尿の入り混じつたような悪臭がマコの鼻を刺激した。

「おめえら、身を引かねえと、このガキの頭が吹つ飛ぶぜ」

自称大魔術師ジゴラが脅しをかけると、警官たちがひるんだ。彼に向けられた手はぼんやりと光つており、その道に精通していない一般の人間からも、男が魔法を使おうとしていることがわかる。そして男の言ひ言葉が眞実だということも。

アルたちは余裕の表情で突つ立つたまま動じていない。どうやら助けてくれる気はなさそうだ。自分でやれといふことか。どのみち、骨の折れる仕事じゃないさ。

「ハッタリじゃねえぜ。さあ、道を開ける。こいつの頭が吹き飛ぶまえに！」

ジゴラが命令をするが、どうしても警官隊たちはこいつを逃がす気はないらしい。この男がしでかしたのはそれほど重要な罪なのだろうか。マコにとつてはどうでもいいことだったが。とにかく男がはやく自分を解放してくれないかと願つた。なにしろこの男は臭いのだ。

「落ち着け、おまえは私欲のために大勢殺した。また罪を重ねる必要もあるまい」

男を追つて来た警官隊のなかでも老年の男が辛抱強い声で言つた。威厳のつもりか、鼻の下にはちょびひげを生やしている。

「ちつ、状況がわかつてねえようだな」ジゴラがぼそりとつぶやいた。

それを聞いてアルがジゴラのまえに歩み出した。

「なんだ、てめえは？」ジゴラは相変わらず、すうみの効いた声で暴言のように吐き捨てた。

「その子を放したほうが身のためだと思つがね」アルはたしなめるように言つた。

「なんだとお？」ジゴラは不服そうになつた。「おい。こり、ぼうず。俺様はなあ、魔術の天才なんだよ。自慢じゃないが、この魔術で何人も殺してきた。このガキの頭を吹き飛ばすぐらい、わけねえんだよ」

そんなものの、自慢でもなんでもないじゃないか。ジゴラの腕のな

かでマコは思った。人を殺した事を自慢できる人間なんて、きっと神経をすりきらせてしまっているにちがいない。

「あまり犯人を刺激しないでください」

警官隊のひとりがアルに注意した。丸眼鏡をかけていて、ビードルの行動には困っていたのだろうけど。

「もうやうこ」った。おい。あんたらも道をあけないと俺様を刺激することになるぜ、警官屋さんたちよ。その刺激で爆発しちまうかもしねえ。そうしたら、このガキの首はあるべきところにや、もうくつついでねえぜ」

その言葉に警官隊たちは動搖し、うしろにさがつた。

「やれやれ、忠告はしておいたからな」言いながら、アルもさがつた。

ちらりとアルに目をやつたのだが、彼は薄ら笑いすら浮かべているように見えた。どうやらこの状況を楽しんでいるようだ。

などと考えていると、なにかが背中の剣に触れる感触がした。「なんだか知らねえが大切そうにしてるじゃねえか。見たところ剣のようだが、上物じや かないのか？」

どうやらこの魔術師の男がマコの大切な剣に手を触れたらしい。

他人に大切な剣を触られたことで、マコはむつとした。

「そんな汚い手で触らないでよ」この男の臭くて汚い手が触れるのはたまらなく嫌だった。

マコの言葉を聞くと、ジゴラは不機嫌そうな顔をし、その顔が怒りに揺れた。

「ガキのくせにこのジゴラ様に命令しようつてのか。もう勘弁ならねえ。殺してやるわ！」

ふたたびジゴラが右手をマコに向けると、てのひら付近の空気が揺れ、赤く光った。熱も帯びている。

「また、止めるんだ、ジゴラー。」ちょびひげの警官が叫んだ。

「無駄い。思い知らせてやるー」

ジゴラがマコの顔に向かって炎を放とつとすると同時に、マコも行動に出た。素早くジゴラの手に自分の手を向けると、彼も魔法を放つたのだ。

火を消すなら水をかけてやればいい。

とは口で簡単に言えるものの、魔法でもってそれを実行するのは至難の業だ。なにせ空氣中にある魔法の素である元素を魔法の実体であるエレメントに変えるのに多少の時間を要するからだ。だがマコはそれをいとも簡単にやっててしまった。

マコの水のエレメントがジゴラの炎のエレメントを飲みこみ、最初からそこになにもなかつたかのように消し去つてしまつたのだ。

「僕だつて魔法は使えるんだ。『ガキ』だからつてあまくみたのが間違ひだつたね」

マコはジゴラの胸に手を当てるとき、炎のエレメントを発生させた。炎が燃え上がり、ジゴラは飛び退いた。

ジゴラは胸を両手で叩きながら、燃え移つた炎を消した。

炎が消えると、ジゴラはマコを睨みつけた。

「だから何だつてんだ？ ちょっと魔法ができるからつて調子に乗りやがつて。あまり大人をなめるなよ！」ジゴラは肩で息をしながら怒鳴つた。「こうなつたら、この市場」と消し去つてやるわ！」

ジゴラは両手をまえに突き出すと、そこから風のエレメントが發生し、ぐるぐると渦まいた。エレメントはどんどん大きくなり、渦まく風は竜巻となりその竜巻がさらに成長を遂げようとしている。

「マコ、やばいぞ！」うしろでアルが叫んだ。

マコは背中の剣を取り外した。

鞘は右側面から空洞になつており、柄を握つて横に倒せば、簡単に取り外すことができた。

マコは剣で成長途中の大きな竜巻を斬つた。

剣が一瞬の輝きを放つたかと思うと、竜巻は消滅してしまつた。それを見守つていた群衆は息を呑んでいた。マコの迅速かつ相手を上回る技術よりも、彼らはマコの手にしている剣の美しさに魅入

られていた。

剣の刀身と柄の間には鐔がなく、奇妙な形をつくりっていた。柄は銀色で、ライフル銃の銃床のような形をしている。刀身は光沢を放つ濃緑色で、木の葉をまんなかで二つ折りにしたような形だ。桜の葉のふちのように刃の部分が細かなギザギザになっている。この刀身と柄が大剣を一枚の葉のように見せていた。

ゆえにこの剣は一葉の剣と呼ばれている。

ジゴラは怒りにまかせて右手を振り上げ、もうこぢり炎のエレメントをつくりてそれをマコにぶつけようとした。

だが、マコのほうが行動は早かった。

一葉の剣を軽く振ると風が発生し、ジゴラを押し倒してしまったのだ。

マコはジゴラに近づき、顔面近くの地面に剣を突き立てた。刃が触れてもらいないのに、ジゴラの頬は切れた。傷は深くないが、出血があつたし、男をおどすには十分だった。

「ほんとうなら、首が落とされているところだつたね」マコは笑顔になつてジゴラにそつとつぶやいた。

それで十分だった。男の戦意を失わせるには。

マコは満足そうにうなずくと、剣を逆手で持つて切つ先を鞘に突っ込むと、それを柄を上に押し上げることで剣全体を鞘に納めた。

「ご協力ありがとうございました」警官のひとりが言った。この警官は顎の下に小さな切り傷があった。小さいときに転んで怪我したもので、決して喧嘩や逮捕劇での格闘の末にできた怪我ではなかつた。彼は体格こそ良いものの、暴力を極端に嫌っていた。

「うん、大丈夫。自分を守つただけだから

それが当然とでもいうように、ジゴラを倒してしまつた少年の態度は素つ気なかつた。

「なにが身を守つただけよ」少年と一緒にいた赤毛の少女が苛立たしげに言った。髪型はショートヘアで、半袖シャツにつなぎの短パン

ンといふ少年のような格好をしている。その少女がマコの頭頂部に拳を落とした。「巻きこまれるかと思ったじゃない」

「痛いよ。リア」マコは殴られた箇所をしきりにさすった。

「あら、マコなら大丈夫よ。絶対に他人を巻き添えにしないわ。わたくしは信じていましたもの」クロネが横から出て来て、マコの頭を確認した。「まあ、ひどい。こぶになつていいじゃない」

「うん。ぼくは大丈夫だよ。それよりもさつきの竜巻の被害は?」

マコはクロネの手を振り払いながら言った。

「マコが一瞬で消して去つてくれたから、皆無事。唯一の被害と言えば、一葉の剣で切られた男の頬くらいかな」

アルは警官たちによつて両脇をがつちりとつかまつているジーハラを見た。一瞬、目が合つたが、すぐに逸らされてしまった。まあここで、魔法による悪あがきをする気はなさそうだ。

「さてと、旅の再開だ」アルは言つた。

一回はつなづくと、アルを先頭にもともと向かつっていた方向に歩き出した。

「あ、ちょっと。なにかお礼を

警官の申し出も聞こえないように、マコたちは歩む足を止めなかつた。警官たちはその背中を呆然と見ていた。

「彼らはいつたい何者なんだろう?」

顎に傷のある警官が言つた。隣にいた警官は、さあ、と首を傾げた。

た。

クロネが「ケた。

足をもつれさせ、前方に豪快に倒れたのだ。両手を突き出したその姿は空を飛んでいるかのようだつた。実際、地面に顎を撃ちつけた衝撃で意識が一瞬だけぶつ飛んでいたが。

「いったああい!」クロネは泣き叫びながら立ち上がつた。「何なのこの道は。デコボコしそぎよ」

黒いワンピースドレスの長いスカートの裾をはたく。

「あんたって良く転ぶわね。本当に歩くのが下手くそ。何度も転べば気が済むのよ?」リアが呆れて言った。

本日八回目である。それはクロネも良く心得ていた。何回転べば自分の気が済むのかは知らなかつたが。

「う、うるさいわね。何回転んだってわたくしのかかか、勝手よ。口を滑らせっぱなしのあなたに言われたくないわね」

クロネの言った『何回転んだって』のくだりは良くわからないが、リアが口を滑らせっぱなしだということにはアルも納得した。言わなくても良いことばかり言つてしまい、そのせいでトラブルを起すことが多かつたのだ。

「ああら。そんなに饒舌なのがうらやましいのかしら。この場合、上舌と言つべきかしらね。あなたの口は喉を詰まらせた老人のような言葉しか出せないものね。オホホホ」と下品に気品高くリアは笑つてみせた。

クロネは顔を真っ赤にして震えている。言いかえしてやりたいが言葉が思いつかないといった感じだ。

「あ、あなたは、じゅんか そうよー あなたは潤滑油を塗りたくなつてゐるよ!」

やつと出て來た言葉がこれだ。リアはぽかんとしている。まったく効き目なし。

言いたいことはわかるぞ。うしろでアルがうなずいた。潤滑油を塗つたように言葉が滑り出でくるのだと、君は言いたいのだろう。だがそれは逆に褒め言葉になつてゐるのではないかうか。

その台詞に満足したのか、クロネはどうだと言わんばかりの田線をリアに送つている。

「そんなんじや、わからぬわよ。ホレ、言いたいことがあるのなら、わかり易く伝わり易く言つてこらんなさい」

リアは頭を少し上に傾いで、田線だけでクロネを見くだして言つた。

「うう……それじゃあ……ええつと……」

効果がなかつたことを知ると、クロネは次に何かびしつとした言葉を決めてやるべつと躍起になつた。だが、いくら頭をフル回転させようと、ついに言葉は見つからなかつた。どうやら彼女の例文辞書は落丁だらけらしい。ついにクロネはマコに泣きついた。

「何とか言つてやつてよ！」

よしよし、と頭をなでるマコを見ているどどつちが年上だかわからなくなる。たしかクロネの方がふたつ上だったよな、とアルは思い出していた。

「リアもいつも言葉が多いんだよ。少しは氣をつけてよね。これはいつも思つてることだけど」マコは言つた。「あとクロネもリアがああなのは知つてゐるんだから、少しばかり聞き流すことを覚えない」と「聞き流すつてのは聞き捨てならないわね」とリアは言つたが、少しクロネで遊びすぎたと、この辺にしてやることにした。

クロネもマコに泣かれたのなら、と仕方なくリアの事は忘れようとした。

言い合ひが治まるど、四人はふたたび歩き出した。いつものようにおぼつかない足取りで、クロネは後方に少し離された。そして本日九回目となる転倒を果たした。

夜には彼らは崖の淵にいた。さきほどの街を出てずつと進み、小さな林の細い道を辿つたら、崖に行き止まつたといつわけだ。しかもそこは船の先端のように突き出でいて、狭い。日も暮れて戻る事もできず、仕方がないので四人はここで野営することに決めた。

焚き火が四人の顔を薄いオレンジに照らし、ちらちらと影を躍らせている。マコの隣にはクロネが寄り添い、火をはさんで向こう側にアルとリアがちょっと離れて座つていた。

「あーあ。いつも野宿ばかり。たまにはふかふかベッドで寝たいわ」リアは不服そうに言つた。「市場ぐらいゆつくり見たかったのに、すぐに街を出るし。観光ぐらいしてもよかつたんじやない？」
「仕方がないだろう、あんな騒ぎのあとじゅあ。それに金がないん

だから、物も買えないし」アルが諭すように言った。

「アンタたち、本当に王族なの？ まったくの貧乏じゃない」

「王族なのはマコだけさ。おれは付き人みたいなものだった。それに言つただろう、おれたちは追放されたんだって」

「はいはい。敵に王国を乗っ取られたんでしょう。それだって、あやしいわねえ」

リアは目を細めてアルを見た。

「あなたって、ホント、世界の情報に疎いのね」とクロネ。「一ヶ月前にサンガルド王国でクーデーターがあり、王子が追放された。それって、絶対にマコのことじゃないのよ」

それを聞いてリアが首を横に振った。

「ふたりが本当のことを言つているとは限らないわよ」

「あら、一緒に旅をしてきてふたりが信じられないっていうわけね、あなたは」

「そうわ言つてないわよ、ただわからないうつて言つてるだけ」

「そう言つてるよう聞こえる」

クロネが目を細め、リアを睨むよじにして見つめた。

「オッケー、わかつたわよ」とリア。「アタシだつて本気で疑つてるわけじゃないわよ。それで、追放された王子さまはこれからどこのへ向かおうというわけ？」

「それはわたくしも知りたいわ」クロネが同調した。「いままではただなんとなく着いて来ただけだもの。これからは目的を持つて行動したいわ」

「ここかずつと北へ向かつてある人物に会おうと思つてゐるのを」アルが答えた。「きっと協力者になつてくれるはずだ。再び俺たちの手に国を取り戻したい」

「なるほど、じゃあ仲間を集めて国を乗っ取つた敵をやつつけてわけね」

リアの言葉にマコは苦笑いになつた。

「説得するに決まつてゐるわ！」クロネが声をあげた。

「なんで、敵を説得しなきゃいけないのよ!」リアが言つた。

「それはクーデターの首謀者がマコのお母さんだからじゃない」クロネは声を落として言つたが、その声は十分マコにもアルにも届いていた。

「うん、倒すよ」それを聞いていたマコがきつぱりと言つた。「説得できる相手なら、もうとっくに父さんがしていたはずだ」

マコの父親であるモーガンは国王として、なにより彼女の旦那としてマコの母親を説得ようとした。だがこのクーデターは最初から周到に用意されたものであり、彼女がマコの父親に近づいた時にはすでに計画は始まっていた。そして彼女はマコを生んだ。その出産が計画的なものだったかどうかはわからないが、国王殺害は彼女の計画のリストに載つており、見事に実行されたというわけだ。

さりにマコには兄がいた。ルーカス・クイーデル。ルーカスは母親であるサー・ラに引きこまれ、一緒に国取りを行つた。彼はマコを処刑する事を考えていた。兄は弟の才能に嫉妬していたのだ。しかし母親のサー・ラはそれに反対し、マコを国から追放した。

それが情けなのが母親としての情なのかはアルには計り知れなかつたが。

マコの側近であったアルは、混乱の最中、一葉の剣を渡され、追放されたマコのもとへと送くられた。こうしてふたりの旅は始まったわけだ。アルに剣を渡し逃がしてくれた老アルテネローは、いつしかマコが帰つて来て国を取り戻してくれる期待をその震える唇で口にした。だがその望みが叶うかどうかは、アルでさせ知らない。

しばらくのあいだ孤独の旅がふたりで続いた。いまでは仲間が四人に増えた。楽しい仲間だ。

「だから、この旅はきっと過酷なものになると思う。ふたりとも嫌なら無理に着いてこなくていいよ。別に無理に連れ回しているわけじゃないから」

「わたくしは、マコに命を助けられたもの。あなたの助けになるならなんだつてするわ。そのために着いて来たんですもの」クロネが

意思を示した。

「アタシだってアンタたちといったほうが楽しいもんね。それに勝手に着いて来るのはアタシだし」

ふたりが彼らと共にいる道理はないのだが、それでも一緒にいてくれてマコは嬉しかった。すくなくともこいつして話している時はこれからの不安や、過去への悲しみを忘れることができた。

「さてと」アルはおもむろに這つて移動すると、小さな茶色い鞄を手に取つた。ここにはなけなしの全財産やら、食料などといった旅の必需品が入れられている。その中から小さな木彫りの像を取り出すと、アルは元の位置にもどつて来た。

「まあ、毎晩と飽きないわね」リアがなかば呆れ声で言つた。
「習慣というやつだよ。それには毎日同じ生活の繰り返しの中にいる。それも飽きずにな」

アルが木彫りの像を地面に立てて置くと、焚き火が像に神々しいオレンジ色の影を投げかけた。像はアルが彫った手作りで、世界を創造した女神の姿をしている。この女神の像に向かつて毎晩、寝るまえに祈るのが、彼の日課であった。

アルは毎日、この信仰心を絶やしたことはない。

彼は目を閉じ、ゆっくりと祈りの言葉を口にした。

「夜の監視者よ、月の女神よ、母なる神よ。今日こいつの御恵みに感謝します。火、水、土、風に宿る精靈神にも同じ感謝と敬意を……そして闇から我らをお守りください。我らに安らかなる眠りのお導きを。そして新たなる一日とこいつ安全が我らにあらんことを……」

アルに続いて三人も同じように祈りの言葉を口にする。最初は嫌がっていたリアも覚えてきたようで、すらすらと文句を読んだ。クロネはまだぎこちなく、アルの言葉を聞いて、それになんとか追いっこうとしているようだ。

祈りが終わるとアルは女神の像をまた鞄の中にしまつた。

「さてと、寝るか」アルはそのままごろんと横になり、倒木に背を

当てて寝た。リアも大きなあぐびをひとつして、両腕を頭上にのばしながら、倒れた。マコは一葉の剣を胸もとにひきよせて、赤子のように眠った。その近くではクロネがマコの寝顔を幸せそうに見つめて満足そうにうなずいた。そしてゆっくりと目を開じた。

焚火の炎はまるで女神の守護のように、眠りについた旅の四人を守るようにしてそのオレンジ色の光で包みこんでいる。実際、この炎には悪しき気を寄せつけない力があった。

炎はしばらく彼らを見守り、日が昇るにつれてそっと姿を消していった。

ヴァイオレーター

日が十分に昇るころには火も消え、薪はすべて灰と化していた。

旅の一行はすっかり目覚め、出発の準備も整っていた。

「いたん引きかえして、昨日の分かれ道で別の道を辿り」アルが言った。

「まあ、そつちにしか道はないもんね」とリア。

一葉の剣を鞘のベルトを使って背中に取りつけると、林へと続く道を凝視した。そのままは真剣そのものだ。

「どうしたの?」あまりにもマコが林を凝視しているので、心配になつたクロネが首を傾げた。

マコは片手をクロネに向けただけで、なにも言わなかつた。ただじつと、林のほうを見つめている。彼の耳は奇妙な音を感じ取つていた。軍団が闊歩するような音。地面が震えている。「なにか来る」マコは言った。

「なにが」アルは質問の途中で口をつぐんだ。いまやその音はアルにも聞こえていた。音は確実に近づいている。

「なにあれ?」リアが指差した。林を突つ切るまつすぐな道、その木立のあいだの遙か向こうに点が見えた。その物体がこちらに近づいているようだつた。しかも目測ではかなり大きい。

「あら、なにかしら?」クロネもそれに気づいたようだ。

「さあな、嫌な予感しかしないけどな」アルは額を右手でぴしゃりと叩いた。

「うん……」マコは心ここにあらずといった声を出した。自然と手が剣の柄にのびる。

点は、はつきりと形がわかる程度にまで近づいていた。白銀色の球体が、こちらに向かつて転がつてきているのがわかる。その球体は太陽の光を反射させ、ぎらぎらとした光をいやらしく放つていて。

「あれは……」クロネが両手を口に当てた。

「ヴァイオレーターだな」アルがクロネの言葉を引き継いだ。

ヴァイオレーター——一ヶ月前、どこからともなく現れた怪物の呼び名だ。気性は非常に荒く、凶暴。その数は日を追うごとに多く発見されており、大量に人間を捕食することから世界を滅ぼす存在などと言われている。ヴァイオレーターの出現により、カタストロフィーを唱える者が現れるほどだ。

「滅亡」の噂などいつの時代でも他にやることがないのかと思うほど、ほぼ毎日持ち出される根拠のない議題だった。

転がつてくるヴァイオレーターに目を凝らすと、完全な球体ではなく、帯状のウロコでおおわれていることがわかる。ある世界ではダンゴムシという昆虫に見えただろう。だが、マコたちにはそんなことはわからなかつた。ただ球体のヴァイオレーターが転がつて来るよう見えただけだ。

「俺に任せろ」アルが前に出た。

「大丈夫なの？」マコが訊いた。

「まあな」彼は腰に差した木製の短剣に手を触れながら前に出た。「自信がないなら、変わるわよ」うしろからリアがふざけて言ったが、アルはそれを無視し、答える代りに短剣を体の前で立てた。「樹木は土に宿り、水がそれを育む」アルは唱えると、短剣を地面に突き立てた。すると、その部分から転がりくるヴァイオレーターに向かって地面が割れた。割れ目は蛇のようにうねりながら敵に向かつてのび、その先から一本の木の根が生えた。次の瞬間にはたちどころに無数の根が地面から突き出し、みるみるうちに木の壁をつくつた。

壁はヴァイオレーターの進行を妨げた。相手がぶつかると、まず壁が震え、つぎに大地が揺れた。

「止まつたか？」搖れがおさまると、アルは木の壁を凝視しながら言った。

「静かね。死んじゃつたんじゃない?」リアが言った。

「まさか、壁にぶつかっただけで……」アルが答えた。

「ねえ、なんか聞こえない？」クロネが不安そうな顔をアルに向かってた。

「これって、まさか……」マコは叫んだ。アルも彼と同じ答えに至つたのだろう。驚愕の顔でうなずいた。

「なんなのよ、これ？」リアが不安になつて声を張り上げた。そうしなければいけなかつたからだ。さきほどまで小さかつた音がいまは耳を震せんばかりに大きくなつている。なにかがアルのつくつた壁の向こうで唸つてゐる。その音は空氣を震わし、耳をつんざく勢いだつた。

「なにも訊かずに壁の前から離れるんだ」アルがゆつくりと警告した。マコもクロネもおとなしくその指示に従つたが、リアだけは納得がいかないようだつた。

「なんでよ？」リア。

彼女、その理由を聞くまで指示に従つつもりはないんじやなかろうか。マコは心配になつた。その説明をしている時間なんてないのに。時間がないことは音の回転速度でわかる。マコはその音の正体を知つていたし、それが危険極まりない音だといふことも承知していた。

アルはリアの肩をひつつかむと、マコたちとは反対の方向へと引つ張つた。その瞬間にそれは起つた。アルがつくり出した木製の壁が膨らみ、そこが熱を帯びて赤く染まつた。かと思うとその部分が炸裂し、紫色の禍々しいビームがまつすぐとのびてきた。それは中心にいくほど赤みがかり、外側にいくほど青つぽかつた。

「なんなのよ、これ？」リアが驚きの声をあげた。

「ヴァイオレーターの攻撃だ」アルが答えた。「大気中の元素を無理やり振動させて、そうやってできたエネルギーを放出しているんだ」

大気中には火、水、土、風の四つの元素が含まれており、一般的に魔法と呼ばれる奇術は、この元素を用いて行われる。人間がもつ

エーテルというエネルギーを放出し、元素と結合することによりエレメントと呼ばれる物質に変化するのだ。火の元素を用いれば、火のエレメントが生まれ、炎を発生させる。水の元素ならば、水のエレメントが生まれて水が発生するといったぐあいだ。それが撃であり、法である。しかし、ヴァイオレーターがやつてみせたのは、元素を無理やり拘束、収斂し、振動を起こさせてエネルギーを発生させる攻撃だ。まさにその法や撃を破る行為だ。故に彼らはヴァイオレーター（違反者）と呼ばれている。

残った壁ががらがらと音を立てて崩れた。もはやヴァイオレーターは球体をしておらず、這いずりまわる甲殻類となっていた。鎧の先には顔があり、意思なき目が虚ろにどこかを見る事もなく見つめている。ヴァイオレーターは彼らを発見するなり、猛スピードで突進してきた。

「飛び降りるぞ」アルが言った。

この狭い場所では逃げ惑うことなく、ましてや突進してくるヴァイオレーターの横をうまく通つて奥の道へ進むこともできなかつた。そこでアルは飛び降りることを決意し、マコも状況を理解して彼に向かつてうなずいてみせた。

「それしか方法はなさそうね。こんな狭い場所で戦つて、どうせ振り落とされるだけだもん」リアはそう言って崖の淵に向かつた。

「え、本気なの？」クロネは当惑した表情を浮かべた。

「ああ、そうだ。できるだけ同時に飛んで、みなで固まって落ちるぞ」アルはマコに目を向けた。「あとはわかるな。頼んだぞ、マコ」三人は同時に飛び降りた。クロネだけが、一瞬ためらつたのち、ちらりとうしろを見やつた。すると背後には甲殻類のようなヴァイオレーターが無数の足を必死に動かして、こちらに向かつている。彼女はぞくぞくと身を震わせた。クロネは虫が嫌いだった。とくにあの細い脚が。

クロネは肚を決めて飛び降りた。

マコルディス・クイーデルは顔面に風を受けながら、頭からまつさかさまに落ちていた。下から吹きつける風は強力で、目が痛かつたが、彼はしつかりと前を見据え、迫りくる地面を凝視している。崖は結構な高さがあり、地面まではまだほど遠かった。

マコの少し右前方をアルが両手を広げ、その少しうしろをリアが両手をバタつかせながら落下していた。クロネの姿はなかつたが、自分よりうしろを確認することができなかつた。

とにかくマコは自分の仕事をすることにした。右手を首のうしろにまわし、一葉の剣の柄を握る。それを背中から取り外すと同時に、大きく振りまわしながら剣を体の前に持つてきた。すると緑色の美しい剣がその姿を現した。

少年が剣を地面に向かつて一振りすると、突風が生じ、地面とぶつかつて砂埃を巻き上げた。その風が上に向かつて吹き荒れ、マコたちの体を少しだけ押し上げて落下速度をいくぶんか軽減した。

マコはその衝撃を利用して体を半回転させると、足から着地した。その少し前にアルが片膝をついて着地し、それを追うようにリアが背中から落ちた。彼女は背中で体を支えたまま上空を見る姿勢になつており、足は顔の上に投げ出されていた。

マコは辺りを見渡し、クロネがいない事を確認すると、上空を見上げた。そこにも彼女の姿はなかつた。まだ崖の上にとどまっているのだろうか。ふと、羽を持つたさつきとは別のヴァイオレーターが近くの上空を飛んで行くのを目についた。あれが足につかんでいるのは、どこか人の形をしているとマコは思った。

「クロネがないよ。まだ崖の上にいるのかも。もしかしたらヴァイオレーターが？」

「クロネなら、あれに捕まつたわよ。アタシ、見たもん」リアが着地というよりは落としたままの姿勢で言つた。指は飛行型のヴァイオレーターを差している。

「それを早く言つてよー」マコが声を張り上げた。

「大丈夫だろ。こざとなつたら雷を落として、逃れるぞ」アルがの

んきに言つたが、マロは事態がそれほど気楽なものではないと思つた。彼が心配して見守る中、飛行型のヴァイオレーターはどんどんと遠ざかるばかりだ。

「捕まつたときに頭をぶつけ、氣を失つてたわよ」体を回転させて立ち上がりながら、リアが言つた。

「それを早く言えよ！」今度はアルが声を張り上げる番だった

ジョンとクロネ

ジョン＝アルバート・クラウスは憂鬱だった。

まったく面白くない。

彼は街の東側に隣接している森を、足もとの地面をじっと注意深く観察しながら歩いていた。

森といつても街の外に人工的につくられたもので、木々は離れた位置に等間隔に並び、生い茂る葉が空を完全に隠すことはしなかつた。今夜は病弱な母親が久しぶりに調子が良く、特製のジャンバンチャューをつくってくれることになっていたので、こうして野生のジヤンバ茸を収穫していた。ふだんなら、久しぶりの母親の手料理がうれしくて、うきつきした気持ちでこの狩りを楽しんだろう。だがジョンはそんなうれしい気分を味わっている余裕がなかった。

というのも、彼がご執心であるリルネ嬢が別の男に恋をしているからだ。

それだけではなく、ふたりはいつのまにやら親密な関係へと発展していた。しかもその男が王都から来たよそ者で、そいつの素性は一切が謎だった。いったい、あんなやつのどこが良いのだろうか？

ジョンとリルネは産着をその身に着けた時からの付き合いだ。よく一緒に遊んだし、ふたりだけの秘密も共有した。それなのに新参者が級に彼女を奪つていったのだ。

これが憂鬱な気分でなくて、どんな気分になれというのだ？

ジョンは紺色のズボンの横に美しい装飾の施された柄を持つ片手剣を差し、十五才にしては思慮の深い青い目を下に落として土に生える野生のキノコを探しながら、緑深い草の上を踏んで歩いた。彼の足もとには上等な大きさのジャンバン茸が胸を張つて草の間から頭を出していたが、心乱れているジョンはそれに気づかず、キノコをまたぎにしてしまった。そのまま前にもキノコはあつたが、彼はそれ

も見逃した。これでは眞田の人間のほうがよほび多くのジャンバ草を収穫できそうだ。

そんなキノコ探しでもままならないジョンであつたが、頭上を王者のように浮遊する危険だけは感じられずにはいられなかつた。始めはなんとなく、嫌な気配だつた。ジョンはこういつた危機を察知する能力は小さなころから備わつていた。彼はその予感を信じることとし、木の陰に隠れて上空の様子をうかがつた。危険が近づいてくるという感覚はぐんと強くなつて、心臓の高鳴りは早さを増した。

巨大な影が空を横切つた。それはジョンの青い瞳に羽を広げた姿を映した。ヴァイオレーターだ。ジョンは背筋がぞくぞくと震えるのを感じた。その身ぶるいはどことなく心地よかつた。おそらく自分にも父親とおなじ武人としての血が流れているのだろう。

だが、やはりその肉眼で見るヴァイオレーターは恐ろしいだけであり、ジョンはその心地よさを無理やり締め出した。巨大な昆虫のようなその体は銀色で、太陽の光を受けておぞましい光沢をどこともない場所に投げ放つていた。そいつは浮遊しながら耳のうしろに生臭い息を吹きかけられるような、不快な羽音を響かせている。それに

それに、あの足にぶらさがつてゐるのは人じゃないのか？ やはりそうだ。ひときわ長いうしろの足にある一本の小さな鉤爪で、少女の両腕を器用につかんで運んでいる。死んでいるのだろうか。少女が暴れている様子はない。それどころかぐつたりしてゐる。

ヴァイオレーターは木と木の間の上空を通過し、向こう側の木の葉に隠れてしまつた。ジョンは相手を見失わないように木の陰から木の陰へと移動した。ヴァイオレーターの団体はでかく、その体重のためかのろのろとした速度で移動している。そのため、追いかけるのは安易なことだった。

ジョンは次に移動した木の幹に肩を押しあて、首を突き出した状態で剣の柄を握つた。木に登つてそこからジャンプすれば彼女を助け

られるだろうかと思案した。

できるだろう。

しかし、その必要はなかつた。

神の氣まぐれか、それとも天の助けか、どこからともなく雷が落ちた。空は澄み渡るような晴天なのに、だ。その雷はヴァイオレーターを直撃し、つかんでいた少女を思わず放してしまつた。

そして、少女は落下した。

少女が落ちた方向へ走ると、枝を力いっぱい引き折る時のような音がした。それに続いてなにかを打ちつける音。体に嫌な感覚をねつとりと塗りつけるような鈍い音だ。

「アイタタタ。自分の放つた雷に痺れるなんて、まぬけね」少女が言った。

クロネは腰をさする手を右ひざにまで持つていき、くの字に曲がったその足の太ももを撫でた。

「だ、大丈夫かい？」

ジョンは死んでしまうんじゃないかと思つぼど髙さから落ちた少女が、あまり血を流していないのを見るとほつとした。落ちた時に枝が額を切つていたが、しづく程度の流血なら、ないに等しいだろう。

「ええ。はずかしいところを見られてしまったわね。でも大丈夫、木の枝がクツショーンになつてくれたから」

クロネは立ち上がろうとしたが、その瞬間に顔をしかめ、短い悲鳴をあげながら前に倒れてしまった。それは急激な痛みに驚いた人間の出す声だった。

ジョンが慌てて、彼女の体を支えた。

「折れてる……」ほとんど囁くような声で、クロネは言った。

「どううね。あの高さから落ちたんだもん、命あるだけでも御の字や」

ジョンはやさしく微笑みながら、背中をさしだした。腰を低くか

がめ、少女が乗りやすこうとする。クロネは少しためりつた。

「どうもいつも、足が折れてるんだろ。医者のところに連れてって

やるよ」

クロネはしばらく考えたのか、しぶしぶ首を縦に振った。

「やうね、その言葉に甘えたほつがよさそうね。でも、今回だけ特別ですわよ」

ジョンはにこっと微笑むと、少女が背中に乗りやすいうように調整しながら、クロネをおぶさるのを手伝った。

少女の体はとても柔らかく、信じられないほど軽い。もしこれがリルネだったら、これと同じような感じがするのだろうかとジョンは思った。いや、もっと良いはずだ。そこには至福という大きな雲のような柔らかさがあるだらう。そう考へてみると、ジョンの顔が運動したあとのように熱く燃え上がった。もし、これがリルネなら

「そんなに耳を赤く染めちゃって、いやらしくことなんか考へているんじゃないでしょうね？」

まさにクロネの言ひどむりだったので、ジョンはじどうもじうじた。口から出る言葉は、はたして言葉と呼べるようなもののかわからなかつた。

「ふふふ、『冗談』

クロネの言葉にジョンは顔も向けないで愛想だけの笑顔をつくつてみせた。このやつとりもリルネとの間に交わされたものなら、それは楽しくて素敵なものだつたに違いない。もし、これがリルネなら

ら

やめるんだ。ジョンはその女らしい考へを捨て去らうとした。いつもは心の奥底に隠しているのに、たまに申し合せたように浮上していくる情けない感情だ。

ジョンは落ちて来た少女を町医者へと運ぶといつ仕事に専念することで、考へを巡らせることを抑えた。

その十五分後、ジョンはクロネを背負いながら、街の医院であるジャンローズ・クリニックのある通りにさしかかっていた。道中、街の知り合いに会い、あれやこれやを質問された。会う人全員、ジョンが女をつくったと思つてゐるらしい。どいつもこいつもニヤついた笑顔を顔面に張り巡らせてゐる。そのつど彼は説明し、誤解を解かなければならなかつた。余所者のクロネは、すべてをジョンに任せることにしていた。

これまでにふたりは自己紹介をし終わり、少女の名前がクローネンバーグ・ユイソナーであることをジョンは知つていた。

「それで、目覚めたときにパニックになっちゃって、とっさに雷を撃つたのよ」

クロネはジョンの背中で経緯を語つた。今まで四人で旅をしてきたこと、そのなかにマコルディス・クィーデルという同世代の男の子がいるということ、ヴァイオレーターに襲われたこと、そしてまた別のヴァイオレーターにつかまり気を失つてしまつたこと、そしてとりわけ、落下したときの様子を詳しく聞かせてくれた。

どうやら少女は魔法の力を操れるらしく、ヴァイオレーターに雷を落としたのは彼女本人らしい。なるほど、魔法の力なら晴れ空なのに雷が発生した理由もうなづける。しかしながら、そのあとの落下のことは計算に入れていたかららしい。直前までクロネは気を失つていたのだし、目覚めてすぐあとの鈍つた頭でとつさの本能が働いたのだとしたら、それも仕方のないことだ。敵から逃れて地上に辿り着きたいという願望といつては、思考と本能との意見は完全に一致していたわけだが。

「ほら、着いたぞ」ジョンは診療所の前でクロネを降ろすと、しっかりと肩を支えたまま彼女を立たせ、目の前の建物をあとでしゃくつた。そこには大きな看板にジャンローズ・クリニックとでかでか書かれていた。

「ジャンロー?」クロネは首を傾げた。

「ああ、医者の名前さ。君を治してくれる。ほら、歩くぞ」

彼女に肩を貸しながらエスコートするジョンの動きに合わせて、クロネは折れていなほつて足でぴょんぴょんと飛び跳ねるようにして進んだ。

扉を開けると、カラカラとかわいらしい鈴の音が鳴った。室内は日の光が取り入れやすいつくりになつており、明るかつた。ジョンに連れて奥の小部屋に行くと、ベッドに二人の男が寝かされていた。三人は大忙しの治療が終わつたとみえ、体中を包帯でぐるぐる巻きにされていた。どれもクロネより重傷のようだ。

近くに白衣を着た男がいた。どうやらこの人がジャンローという医者らしい。

ジャンローはクロネに気がつくと、どうしようもなく塞ぎこんでいる人間でもその悩みを吹き飛ばしてしまった。そんな笑顔を彼女に向つけた。

「急患ですか、どれ診察をいたしましょう」

三人は非常にゆつたりとしていた。ひとりがヴァイオレーターにさらわれているといふのに、さきほどのように誰一人慌てている者はいない。

リアはなにやら下を見つめ、奇妙な形の石を蹴つていた。

アルはていねいに整理された小道のわきに鎮座している大きな岩の上に立つて、どこか遠くに真剣なまなざしを向けている。

マコは馬車が通つたであろう轍にたまつた水をのぞきこんでいた。まるでそこに追い求めていた真理でも落ちていてるかのようだ。

「どう思う？あれはクロネの雷だつたよな」アルは石から飛び降りながら、言った。

「あたりまえでしょ。こんな晴れた日に自然の雷が落つこちるわけないじゃない」リアは蹴つた石が背の高い草むらのなかに飛びこんだので、それを足で草をかきわけて探したが、すぐにあきらめてふたりに近づいた。

「あの妙に紫色の雷はクロネだよ。自然のだつたら、あんな色は出

ない」とマコ。

三人の意見が一致したところで、アルが口を開いた。「その方向に街が見えたぞ。とりあえず、そこに行つてみるか」アルが雷の見えた方角に向かうと、マコとリアのふたりは着き従うように彼のあとを追つた。

その広間の真ん中には大きな机が置かれており、それを取り囲むように三人の男が座っている。ひとりは黄金の縁取りをした黒衣を着て、室内だというのにフードを頭からすっぽりと被っている。もうひとりは短く刈りあげられた白い髪がもみあげからあご鬚に繋がり、口髭にまで達している。最後のひとりは喉の皺がたるむほどやせ細った老人で、空色の服の上からベージュの前掛けという聖職者のような出で立ちをしている。フードは向かいにいる黒衣の男とは対照的で、首のうしろのところでおとなしく腰をおろしていた。

三人のまわりには、さらに長椅子が方形を描くように並べられており、それぞれの従者たちが静かに座り、三人の話し合いの様子をじつとうかがっていた。

「それでは、どうしてもこちらに渡してはもらえないということだな」白髪の男　　その落ち着きを払った物腰と、真実までを見通すような鋭い眼光、そしてその腰にぶら下げる立派な剣から、腕の立つ剣士であることがわかる　　が言った。

「ああ、あれは俺の部下だからな、俺のところで預からせてもらつフードを田深にかぶつた男が答えた。

「ふざけるな！」白髪頭のうしろにいた男が怒りをあらわにして立ち上がった。

「エド、やめるんだ」白髪の男がうしろにいる若い男に振り向かず

に言った。

「しかし、ウイリアム団長、やつらは街の人間に大怪我を負わせた。それをかくまおうとしているんですよー。」

「かくまうとは、語弊があるようだな」黒衣の男が静かに言った。

「俺は自分の部下は自分で処分を下すと言つてはいるのだ。それが部下に対する責任もあるからな」

「街に対する責任はどうなんだ?」エドがくつてかかる。問題を起こした側であるのにも関わらず、上から見下すような男の態度が気に食わなかつた。

「それに関してはこちらから正式な謝罪があるだろ?」「それだけでは足りないな」白髪の男ウイリアムはエドが口を開く前に言葉を発した。熟考してから発言するウイリアムにしては素早すぎるといつていいほどの対応だ。それほど自分が粗暴な態度を取つていたのだろう。ウイリアムはエドの発言権を剥奪したのだ。だが彼の行動がエドの頭を冷ませたと言つていい。彼は口を閉ぢし、腰をおろした。

「なにが足りないというのだ?」黒衣の男が言つた。
「結果が欲しい」ウイリアムは答えた。「あなたがたが今回起こした問題に対しての唯一の謝罪は言葉ではなく、結果だ」

「ほひ、といふと?」フードで男の顔はほとんど見えなかつたが、エドには男が眉を吊り上げたのがわかつた。

「あなたがたは強引にもヴァイオレーター退治を申し出て、この街に居座つた。我々の歓迎を受けていないことを忘れないで欲しい。そしてそのあなたがた我々の信頼を得るにはその申し出を達成するほか方法はない」

これまで黒衣の男は押し黙つてウイリアムの言葉を聞いていた。だがそうするために男が相当の我慢を強いられているようにエドには見えた。この男は他人が自分の上に立つことに慣れていないのはおろか、それを極度に嫌つているらしい。

「でなければ、この村から出て行つてもひづほかないだろ?」

「だが、俺たち以外にヴァイオレーターを倒せる者はあるまい。おまえたちの剣ではやつの皮膚に傷をつけることさえできなかつた」

ここまで寡黙を保つていた年老いた男が口を開いた。

「じゃが、あなたがたが三回もヴァイオレーターを取り逃がしておることも、また事実じゃ」

「次こそは仕留める」

「そつしてももらわねばこまるな。でなければこの街はヴァイオレーターだけでなく、君たちというふたつの厄介ごとを抱え込まなければならなくなるのでな」

男は歯を食いしばっていた。自分が口にされていのよつて悔しがつているのだろう。

男の口もとが緩んだ。

「俺たちが厄介ごとだというのなら、古の魔女とやらほどつなんだ？ そいつも追い出すつもりなのか？」

古の魔女という言葉を男が口にするのを聞いて、年老いた男は驚いて顔を強ばらせた。それを見て、黒衣の男が嬉しそうに口もとを吊り上がらせた。

「キンバリー長官殿、どうだらつか、俺たちがその古の魔女を退治してしまうといふのは」

老人は首を横に振った。

「やめてくれ。魔女に手を出せば、街に仕返しが来る

男は声を上げて笑った。

エドは立ち上がった。両腰に差している一本の剣のうちか、片方に手をやる。この場でフードの男を叩き斬つてやる心づもりだ。だが振り返ったウイリアムに鋭い眼光を向けられて、エドは座つた。

「俺たちに楯ついても、仕返しが来るかもしれないぞ」男は言った。「どうあがいても俺たちの魔法に、そこにいる騎士団の剣が届くとは思えない」

なんという暴挙にでたことか。あらうことかこの男はこちうに齎しをかけ、自分のほうが立場が上だということを示そうとしている。エドは腹の中に焼け石を突っ込まれたような気分だった。いつから炎を吐き出してもおかしくはない。

「まあ、そんなことは起こらないと思うがな」と黒衣の男。「心配しなくとも、俺たちがヴァイオレーターを倒してやる。そつちは俺が提示した報酬を渡してくれればいい。そしたら大人しく出て行つ

てやるの」

そう言つと男は立ち上がつた。

「それまでは俺の部下たちの少しの粗暴には手をつむつてもいいわ
かないな。だが、約束する。少しほそえるよつに言つておひづ。そ
れでいいだろ？」

「我々はただ君たちに問題を起こして欲しくないだけじゃ、ヴァイ
オレーターを倒してくれるのなら、約束の報酬は払おう」キンバリ
ーが答えた。

「よろしい」

黒衣の男はうなずくと、退出した。男の背後に座つていたふたり
の男、ひとりは前歯が欠けて鋭利になつており、もうひとりは左
頬に猫の髭のような三本の細い傷がある。立ち上がると、黒衣の
男に着いて広間から消えて行つた。

エドはその場に座つたまま、言い得ぬ敗北感を歯で強く噛み締め
た。

黒衣の男は最後まで自分が優位にある立場を保守したまま立ち去
つたのだ。

ウイリアム・クラウス騎士団長は寡黙を保つたまま考へこんでい
た。キンバリー長官はその様子をおずおずと見守つている。ウイリ
アムの弟子であり、騎士団の副団長であるエドはまだ煮えたぎる思
いがあるのか、空中をじっと睨んでいる。

「まるで盜賊じゃないか」エドが口を開いた。「こつちは食事まで
無償で提供しているんだぞ」

「信用はできないが、やつらの力に頼るしかあるまい」ウイリアム
が言った。その声に揺らぎはなかつたが、焦燥が感じられた。

「君たちでも歯が立たなかつたヴァイオレーターを追い返してみせ
たのは、他でもないやつらじゃからのう」とキンバリー。

「悔しいですよ」エドは言つた。

だが、どうすることもできなかつた。ぐだんのヴァイオレーター

に剣は歯が立たず、問題の魔導士たちがやつて来なければ街は今頃酷い有様だつただろう。

一週間前の惨劇をエドは覚えている。

街中がパニックと恐怖の入り混じつた悲鳴で満たされた。騒ぎにウィリアムたちが駆けつけると、巨大な翼を持つた爬虫類型のヴァイオレーターが西側と南側の壁とがちょうどぶつかる辺りで暴れていた。シャズの骨董品店はほとんどが倒壊しており、血を流している者、倒れている者、死んでいる者などで騒然としていた。 ウィリアムは剣を抜き、果敢にもヴァイオレーターに斬りかかつた。敵は細長い首をのばし、迫りくる戦士に噛みつこうとしたが、 ウィルは素早い方向転換でそれを避けると相手の首の根っこに刃を突き立てた。鋭い摩擦音と火花が飛んだが、ヴァイオレーターの皮膚には傷一つできていない。

少し遅れてうしろからエドが突進した。両腰から牙のような刀身のショートブレードを抜き、その一本の剣で胸部を斬りつけた。やはり同じ結果だった。

それから師弟はふたりでヴァイオレーターとの攻防を繰り広げた。 その光景を騎士団の団員たちは黙つて見ていたしかなかつた。ただ ただ畏怖の念でふたりの戦いを見つめていたのである。

だが、ふたりの戦いはその激しさとは裏腹に相手に与えるダメージは皆無だつた。傷ついているのはヴァイオレーターの皮膚ではなく、彼らの剣のほうだ。

「くそつ。化け物かよ、こいつ。全然、刃が通らない！」エドはぜいぜい喘ぎながら言った。

「化け物だよ」 ウィリアムが答えた。「ヴァイオレーターはみな化け物だ」

ウイリアムの言葉に答えるように、ヴァイオレーターは喜び勇んでその尖つたきざきざきの歯を、彼に当ってきた。 ウィルはそれを剣で弾いたが、それが限界だつた。手は痺れ、体力はくそ、俺も歳だな 底を尽きていた。

ヴァイオレーターはこれがトドメだと叫うよつに、最後の咆哮を空に向かつて放つと、ぎざぎざに尖った歯を剥きだしにしてこんどはエドに噛みつきにかかった。エドは首をすくめて身構えたが、足がもつれて尻餅をついてしまった。

彼は命をあきらめた。歯が彼の体を貫くのは確実だつた。だが、歯が彼に届くことはなかつた。

ヴァイオレーターは長い首を持ち上げて、苦痛に叫び声をあげた。さきほどヴァイオレーターの顔があつた場所に爆煙があがつている。

いつたいなにが起こっているのか、エドにはわからなかつた。ウイリアムと目が合つたが、彼も状況がわからないといつたぐあいに肩をすくめてみせた。

「剣が効かぬのなら、俺たちの魔法で撃退してやる」

黒衣の男が十数人の男たちを引きつれてやつて來た。彼らは円陣を組んでヴァイオレーターをとりかこむと、両手をヴァイオレーターに向けた。その手の先がぼんやりとひかり、赤、青、緑など様々な色に輝いた。

かと思うとその光は放たれ、ヴァイオレーターに降りそそいだ。

ヴァイオレーターは苦しみ、大きな翼を広げて飛びたうとした。男たちは上に向かつて追撃を放つた。光はヴァイオレーターにさらなるダメージを与える、街を襲つた怪物は上空を上下に揺れながら街を囲む壁を飛び越え、そして退散した。

黒衣の男は名をヴァルマーと名乗つた。彼は礼を告げるウイリアムに対してヴァイオレーターは必ず戻つてくると言及し、自分たちを雇うことを勧めた。そしてその通りになつた。一回、三回と起つたヴァイオレーターの襲来は街にさらなる被害をもたらした。

その都度、ヴァルマーとその配下たちによつて撃退されるのだった。

そのような出来事があつたからこそ、キンバリー長官は魔導士たちを追い出す決意を下すことができないでいた。魔導士たちは街の

治安を乱しているかもしれないが、それ以上にヴァイオレーターの脅威から街を救っているのだ。少なくともいまのところは。まさに板挟み状態だった。

「魔導士たちの問題を残して街を離れるのは気が進まんな」 ウィリアムが言った。

ウィリアムは明日、数十人の部下を引き連れて使者として北のエムーデラ領へ向かうことになつてゐる。王都で会議があるためだ。そこへウィリアムは国が管理するこのシエラの街の代表として赴くことになつてゐる。

そこで一、三の事務的な報告と業務があるのだ。

「あなたがいなくとも、俺の田の黒いうちはやつらの好き勝手にはさせませんよ」 エドは自分に言い聞かせるように言った

「そう願いたいな。なにも起こらねばよいのだが

ウイリアムは吐息のよつとつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922z/>

マコと一葉の剣 グラス・オニオン

2011年12月25日21時01分発行